6月例会

美星町の史跡巡り

中世夢が原と三村氏発祥の地を訪ねて

主催　備陽史探訪の会

スケジュール

◎８時３０分福山駅北口発――◇１０時小笹丸城跡（美星町黒忠）

◇１１時１０分豊山八幡神社――◇１１時３０分八日市

◇１２時１５分中世夢が原（昼食）・２時１５分同発

◇２時３０分蔵光三村氏館跡（美星町星田）

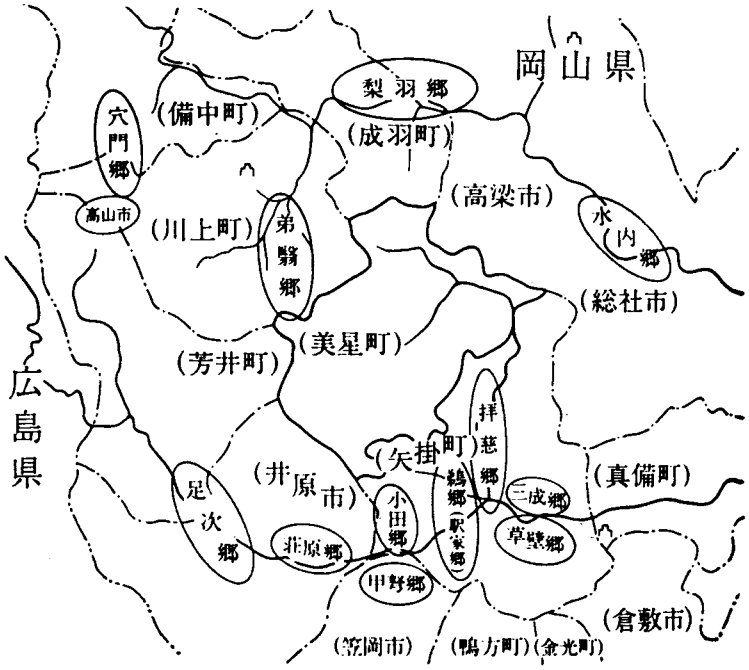
◇３時法雲山城跡（同）――――◎５時福山駅着解散予定

美星町章

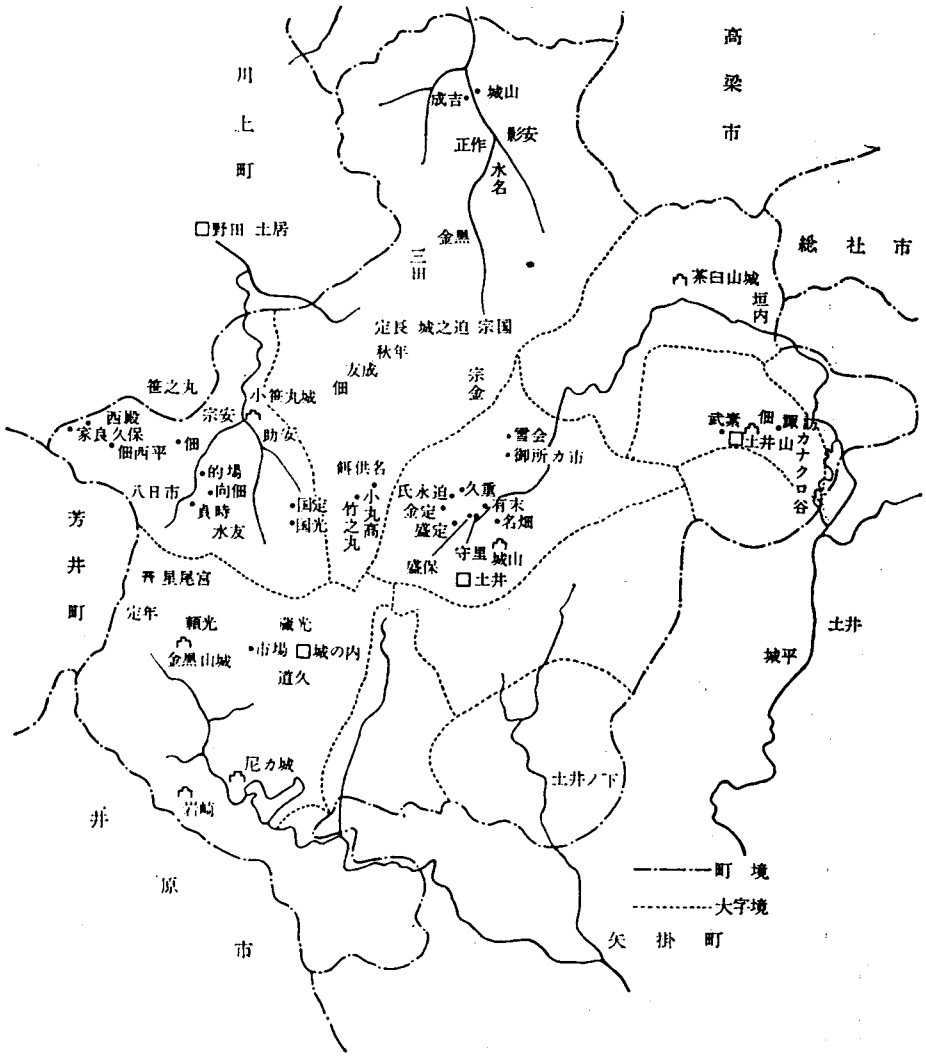
美星町

面積七三・二二平方キロ

郡の北部に位置する。北は川上郡成羽町・高梁市、東は総社市、東と南は矢掛町、南は井原市、西は後月郡芳井町・川上郡川上町と接する。吉備高原南端の標高約三〇〇―四〇〇メートルの台地上に開ける。いずれも高梁川水系に属する小田川支流の美山川・大倉川、成羽川支流の日名川などの上流地域にあたる。黒木から産する貝殻石灰石は、県南古墳の石棺に使われている。近世、幕府領・藩領・旗本領が錯綜、各村ごとの領主も目まぐるしく変遷し、山間地であることと相まって、山論・水論なども多くみられた。明治二二年（一八八九）町村制施行により富成村・美山村・宇戸村が成立、富成村は同三三年に堺村と改称、昭和二九年（一九五四）この三村と川上郡日里村（明治二二年明治村・黒忠村が合併）が合併、美星町が誕生した。主産業は農業。近年、畜産（養豚・肉用牛）・酪農・葉煙草・野菜・花卉・桃・茶などを重点に、県南・備後の工業地帯後背地としての特性を生かす、都市近郊型農業地域をめざし発展している。

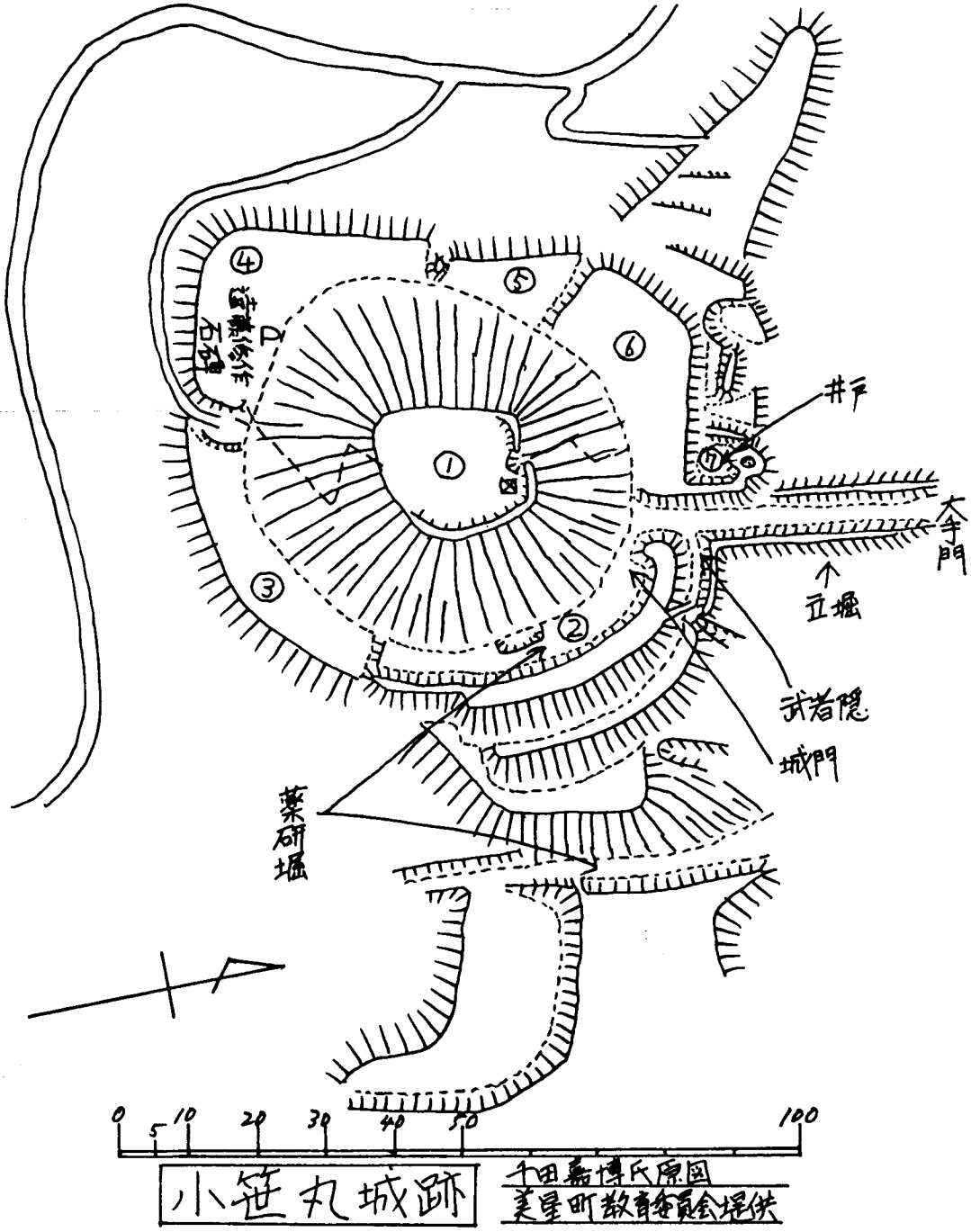


郷の分布



中世に起原のありそうな地名

(1)



小規模ながら，本丸，二の丸，三の丸と，ちようどクリスマスケーキのように彫りの鋭い典型的中世後期の城砦。井戸，土塁跡，掘割り・高揚などを残した平山城型。

慶長19年廃城になったと伝えられている。城址の山麓に近世になって「竹野井常陸守氏高公，平等院殿威覚永長大居士尊位」の供養塔が建立されており，平等寺には，同名の位牌がある。

豊山宇佐八幡神社（宮ノ峠）

小笹丸城主であった竹井光高が宇佐八幡の加護を得て戦に勝利をおさめたことから勧請した。黒忠地区全域を氏子としている。当社の秋祭は「オトグンチマック」と呼ばれ，神主は，創立以来代々神崎，宮田氏，後に再び神崎氏に姓を改めた。

八日の三斉市

八日市は小田，後月，川上の三郡の境界にあり，中世からの定期市，つまり，8，18，28日の月3回，催される市で，井原市の七日市，川上町の小谷市，高山市などと共に海の幸，山の幸の交易場となっていた。長泉寺縁起によると，九鳥左衛門尉景定が城を構えていたが，貞治元年(1362)，寺になったといわれる。なお，長泉寺前の法華題目自然石は大覚大僧正の追善供養塔とみられ，近世の建立であるが，イボとりのご利益でも信仰されていた。

八日市の宝篋印塔（上(のろ)町）

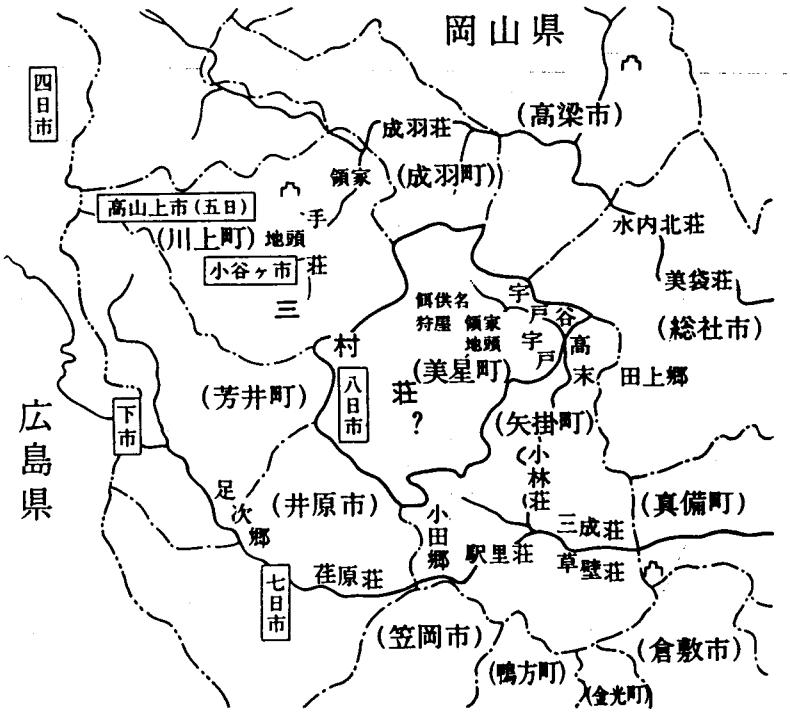
請花と九輪の先端の宝珠が失われているが，比較的大型であり，また，その形からも鎌倉期の作とみられる。また，岩質はこの地域の宝篋印塔，五輪塔が石灰岩である中で稀にも花崗岩でしかも粗形のまゝであることなど，謎のある石塔である。

領主九鳥氏との係わりがあるかも知れないが，日蓮宗長泉寺の創立以前の建立とみられる。なお，端には，大師堂があったが，これも八日市開闢(かいびやく)の元口といわれてきたものであるが，すでに廃毀された。

首なし地蔵（上町）

昭和50年に発掘され，「長寿の首なし地蔵」「進学地蔵」と言い伝えられ，献花と香煙がたえない。

◀首なし地蔵

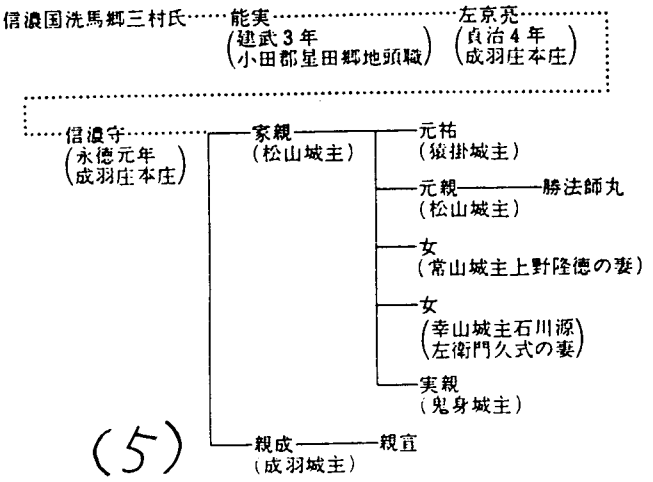


荘・郷・三斎市の想定地図

みむらし　三村氏

中世備中国の有力武士。三村氏の祖は，承久の乱（1221年）の後，新補地頭として備中国に入部した東国武士とみられる。前任地は信濃国筑摩郡洗馬郷（現長野県東筑摩郡朝日村西洗馬）と伝えられ，現在の小田郡美星町星田・三山，あるいは川上郡川上町三沢あたりに補任されたと思われる。元弘の乱（1331年）では後醍醐天皇に味方し，続く南北朝時代にも*三村左京亮*は南朝方として成羽庄を領し，水内北庄に侵入，*三村信濃守*は天竜寺領になった成羽庄の奪回運動をくり返した。永正～天文年間（1504～1555）に入ってからの三村氏は水内北庄への侵入，*三村左衛門大輔*の荏原庄領有など備中国内の有力国人に台頭した。さらに成羽の鶴首城を本拠地とする三村家親の代に入って毛利氏に属し，備中松山城を奪って荘氏に代わり備中中部を牛耳る勢力となった。その後も家親は毛利氏の支援を得て備前，美作に攻め入りたびたび宇喜多直家と対決したが，1566年（永禄９）家親が美作の興禅寺（現久米郡久米南町下籾）で直家に暗殺され，さらにその子元親が翌年明禅寺合戦で直家に敗れてからは勢力が衰え，ついには毛利氏が宇喜多氏と結んだことから元親は1575年（天正３）毛利氏を離れて織田氏と結ぼうとしたため，毛利・宇喜多の連合軍に攻められ松山城も落ちて滅亡した。元親の毛利離反に反対した元親の叔父親成はその後も毛利氏に味方して家禄（ろく）を得たが，関ケ原の役後毛利氏が削封されてからは禄を失う。

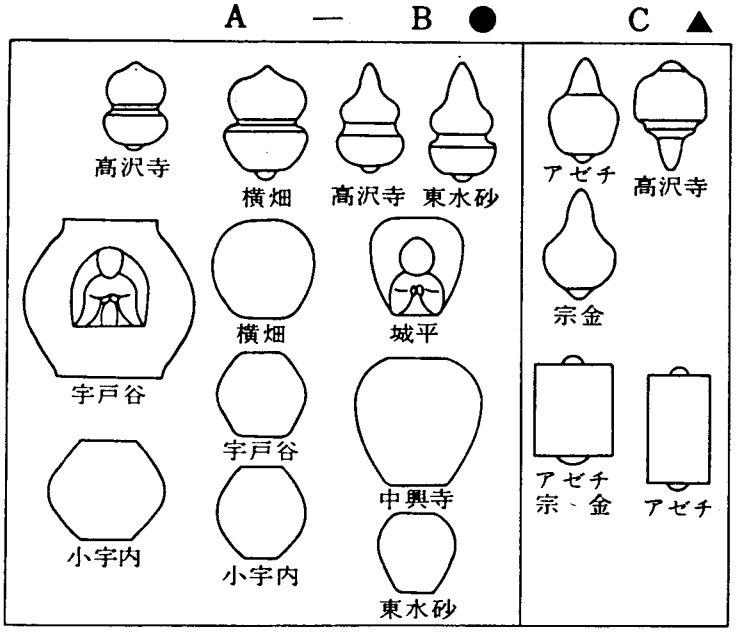
三村氏系図



三村氏「城の内」（蔵光）

星田の蔵光には「城の内」と呼ぶ2～30アールの台地があり，周辺には堀の跡も残っている典型的な中世豪族屋敷跡である。これは，金黒山城を砦とした三村氏の居館跡といわれている。周辺には，古い五輪塔や宝篋印塔もある。

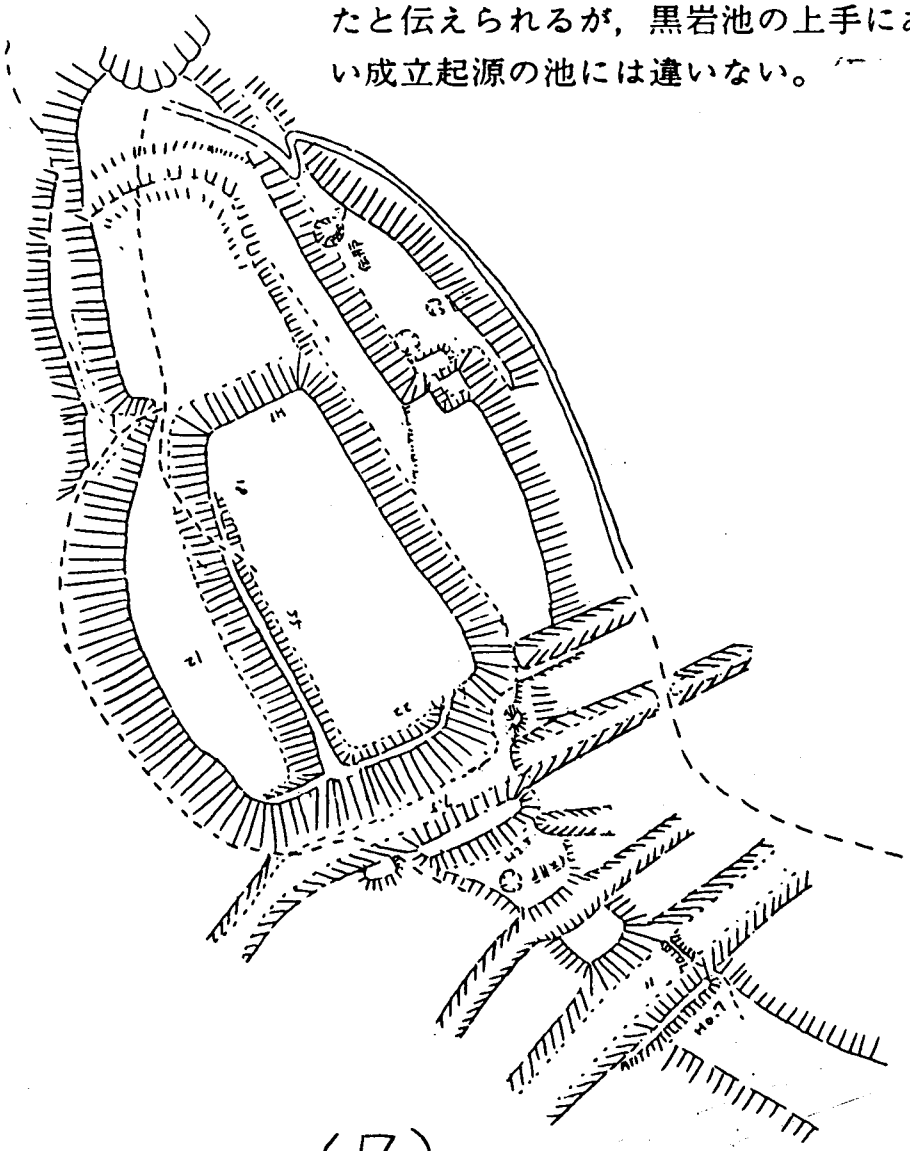
数多く、町内各地に所在する五輪塔などは、別表にしてまとめた。これに標した番号は、それぞれの遺跡番号として、分布図や、写真に記した番号と一致している。また、五輪塔を一応形で分類したが、その大略の類別は左の模式図に示した。分布図の上では煩雑となるため、AとB型とは区別せず、すべて●標で示した。またこの両者は、正確には分れ難いものでもある。A型は鎌倉末頃から、B型は室町中頃に中心があるように思われた。C型は分布図では▲で示した。この型式は五輪が形を変えて、丸いはずの水輪が退化してしまい方形になっている。この型のものは室町末期から戦国時代ごろのものと思われる。それぞれの形のものの所在の仕方は町内でも注目される。



五輪塔模式分類図

金黒山城址（頼光）

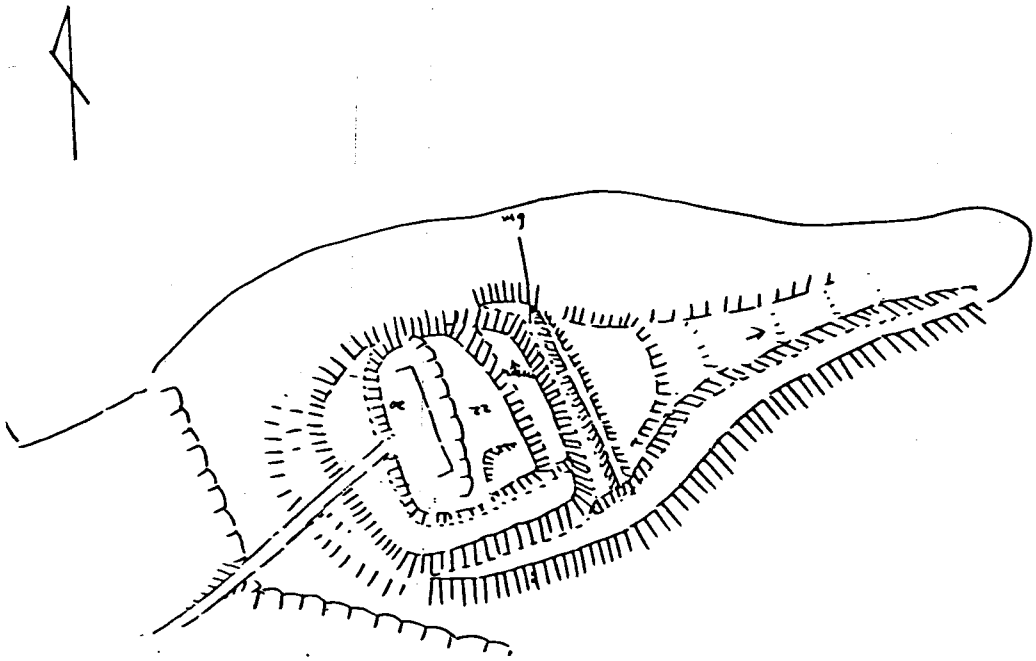
備中の戦国大名三村氏の故地は星田の蔵光といわれるが，その砦が金黒山城である。俗に頼光谷の城山という。東に星田川，西に天田川が流れる位置に要害を築き，地ならし，堀割，井戸などを設けた遺構があり，中世前期の山城型である。この城址の北隣の山地から16世紀中期までの中国の古銭が360余り発見されているのも意味深い。また，金黒山と蔵光とのほゞ中ほどには，「刀洗いの池」がある。戦いの後で，刀を洗ったと伝えられるが，黒岩池の上手にある古い成立起源の池には違いない。



中興寺と法雲山城址（平）

曹洞宗法雲山中興寺は鶴見の総持寺を本山として，井原市東江原の法泉寺末寺として，文亀3(1503)年正月，梵機和尚の開山に始まるといわれる。当時，三村氏は石清水八幡宮領水内北庄(現在の高梁市水内)に乱入したりして勢力を延ばしており，荏原庄の伊勢氏と対決していた時期と思われ，その出城として法雲山城が築かれ，中興寺その館を兼ねて創建されたとみられる。尼ヵ城，栗山城も一連のものであり，共に，中世後期の平山城型である。

法雲山城は天正2(1574)年ごろには，三村左衛門大夫為親が居城し，やがて，一族と共に没落し，城も廃墟に化したとみられる。城址には五輪塔，宝篋印塔などが散見される。



みむらいえちか　三村家親

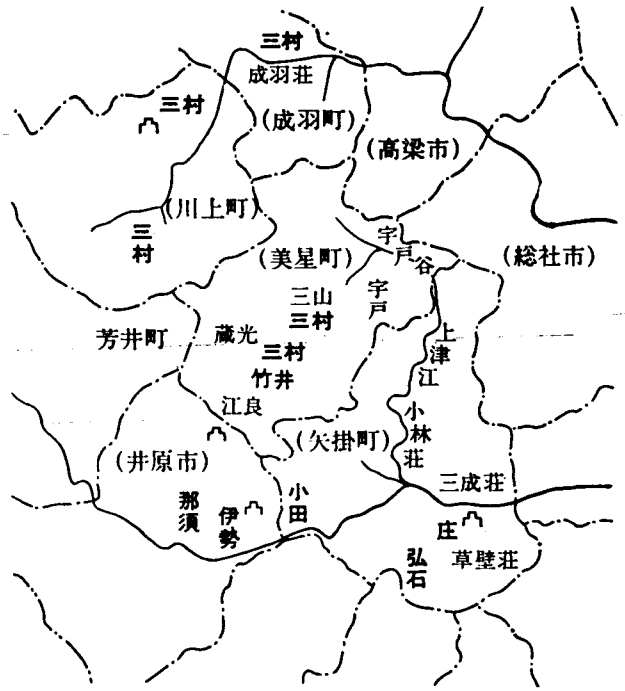
？～1566・2・5（？～永禄9）戦国時代の備中松山城主。三村宗親の嫡子として生まれる。父の遺領をつぎ，毛利氏の支援をうけ勢力をしだいにひろげ，1533年（天文2）成羽に侵入。1553年（天文22）猿掛城主荘為資，1561年（永禄4）には，備中国の中心地松山城主荘高資を破り，本拠を成羽から松山城に移した。家親は当時尼子氏の勢力下にあった備中全土を攻略し，美作，備前へも進出しようとし，備前の宇喜多直家と争うことになった。1563年（永禄6）家親は兵を備前に進め，一挙に船山城（岡山市牧石）を攻略し，宇喜多勢の西進をはばんだ。さらに1565年（永禄8）5月，北に転じて，兵を美作路に派し，作東地方の三星城（現英田郡美作町）を攻めたが，攻略することができず，翌年の春，再び作州に攻めこみ，宇喜多氏の諸城を攻め落としていったが，直家により美作の興禅寺（久米郡久米南町下籾）で暗殺された。現在家親の墓は*頼久寺（らいきゅうじ）*（高梁市頼久寺町）にある。

みむらちかなり　三村親成

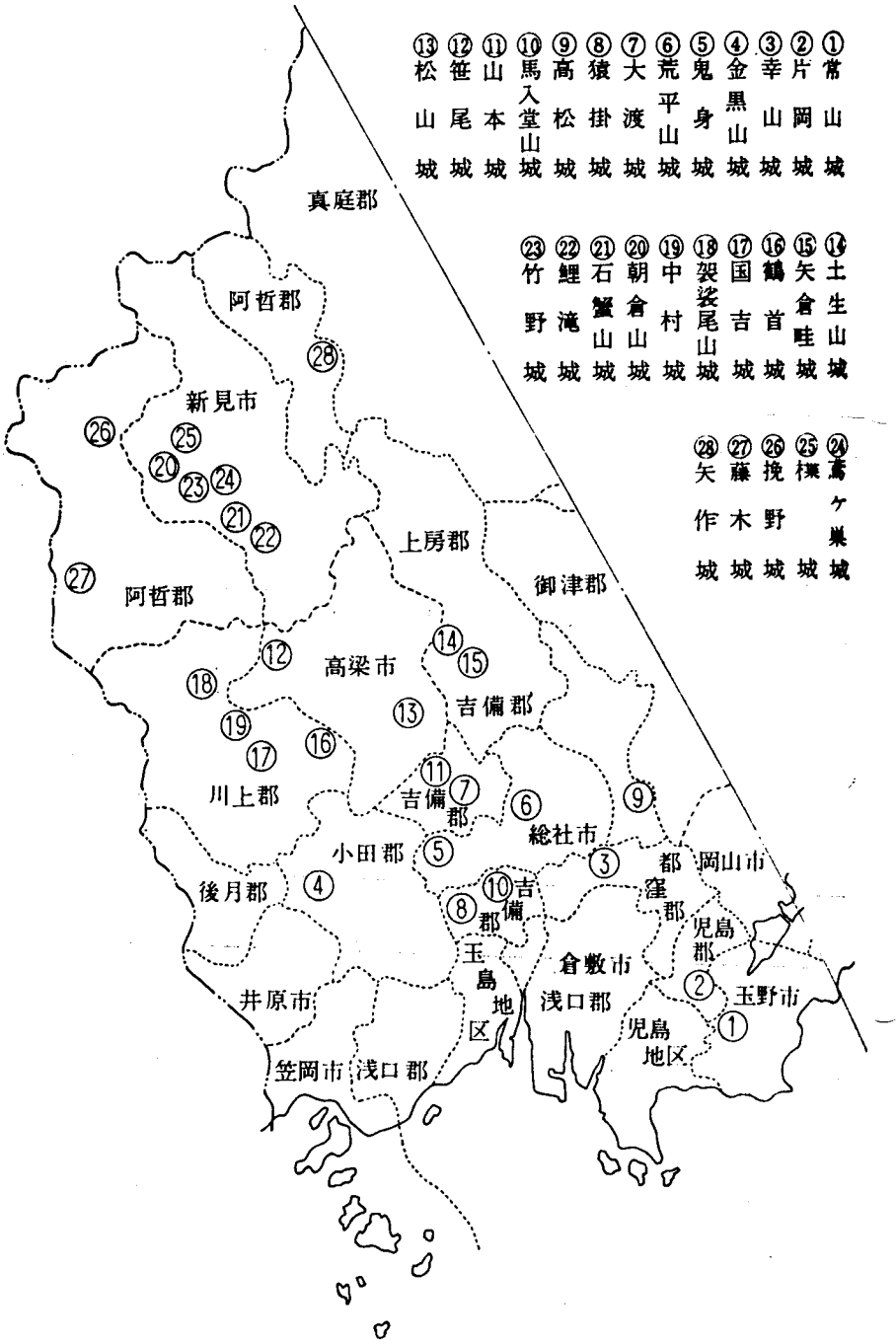
生没年未詳。戦国時代の武将，成羽城主。三村宗親の二男，家親の弟。初め孫兵衛のち越前守と称す。家親の子元親が備中松山城に移って後，成羽（鶴首）城主となる。家親の死後，織田信長と結び毛利，宇喜多と戦おうとする元親と対立，嫡子親宣とともに安芸に走り毛利を頼る。1575年（天正3）松山落城，元親自害の後に再び成羽城主となる。毛利の麾下（きか）として播州上月の役，高松城水攻めに従軍，ついで秀吉の四国，九州征伐，朝鮮の役に従軍する。関ケ原の役後流浪の身となったが，かつて世話した水野六左衛門が備後福山城主となると知行1000石をもって迎えられた。

みむらもとちか　三村元親

？～1575・6・2（？～天正3）戦国時代の備中松山城主。三村家親の二男。1566年（永禄9）家親が美作の興禅寺で宇喜多直家に暗殺され，備中松山城主となる。翌年，叔父の成羽城主三村親成の反対を押し切り，2万の軍をもって備前に侵入，宇喜多直家と明禅寺城（岡山市沢田）付近で戦ったが大敗して備中松山に逃げ帰った。この合戦を世に〈明禅寺合戦〉とも〈明禅寺崩れ〉ともいう。その後，元親は毛利氏が宇喜多氏と結んだため毛利氏から離反し織田信長と結び宇喜多氏に対処した。しかし，成羽城主三村親成はこの織田氏との同盟に反対し，元親の報復をおそれ毛利氏のもとに走ったため，小早川隆景はただちに全毛利軍を率いて備中に侵入，元親配下の諸城は次々に落とされ，1575年（天正3）5月，ついに元親の本拠松山城も攻められ落城した。元親は再起を期していったんは城を抜け出したが，松連寺で辞世〈人といふ名をかるほどや末の露消えてぞかえるもとの雫（しづく）に〉を残して自害した。

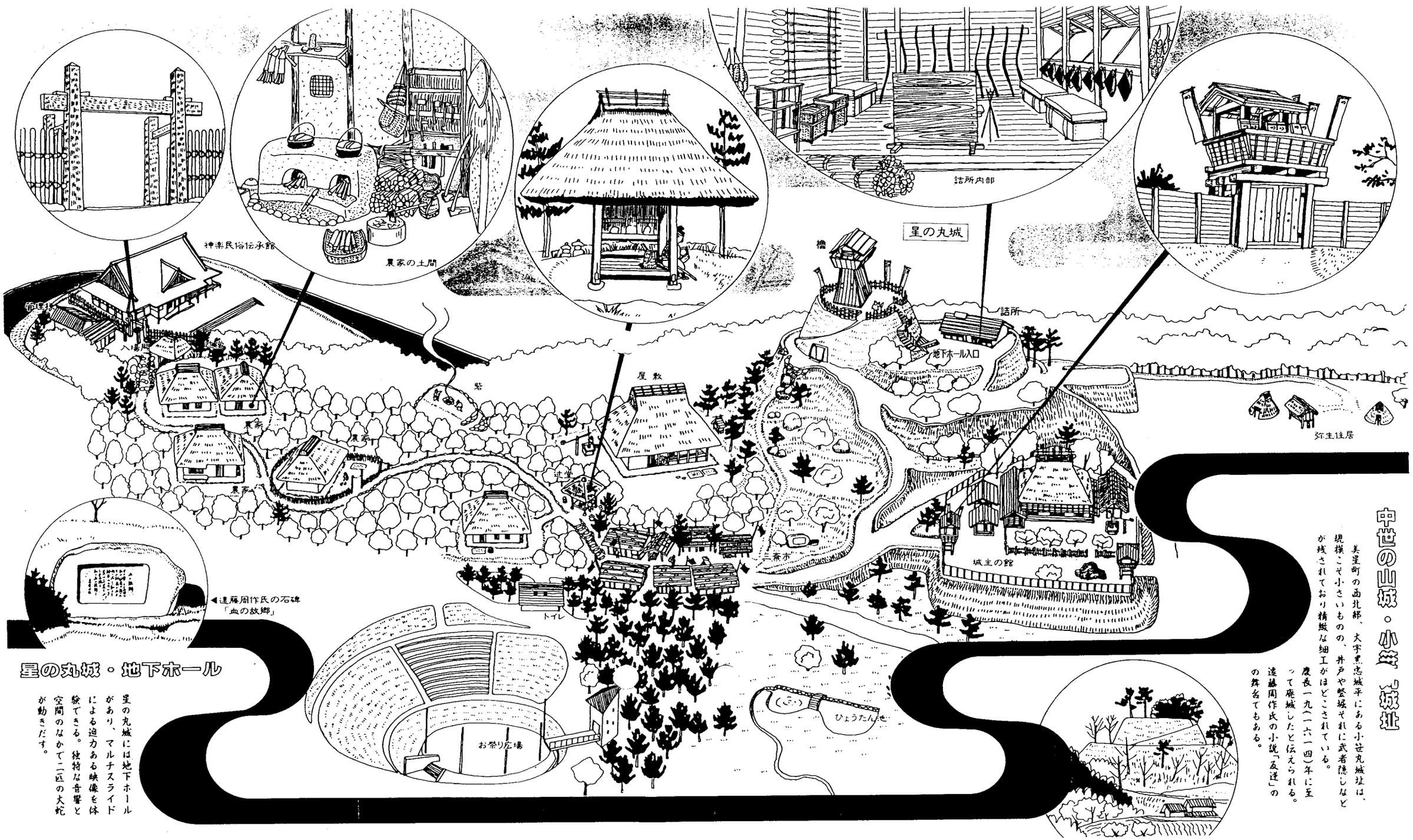


中世の備中中西部



戦国時代の三村氏方城砦跡　参考文献「岡山城と城址」ほか

城名	三村氏時代の城主（天正二年）	毛利氏時代の城主（天正三年暮ごろ）
松山城	三村修理亮元親	城代天野五郎右衛門、桂民部大輔
猿掛城	三村兵部允、同庄大夫	毛利治部大輔元清
国吉城	三村右京亮、大月源内	吉川駿河守元春の城番今田山城守
鶴首城	三村左馬允	三村越前守孫兵衛親成
新見杠（ゆずりは）城	三村宮内少輔元範	宍戸備前守隆家　在城宍戸善左衛門
山田鬼身城	上田孫次郎実親	
秦村荒平山城	川西三郎左右衛門之秀	
美袋山城	三村民部忠秀	
多気（竹）庄矢倉畦城	中村掃部助	
多気庄野山城	伊達宮内少輔	伊達宮内少輔
幸山城	石川孫左衛門久式の城代友野、弥屋、江口	小早川左衛門佐隆景　城番　国司壱岐守　加番　中島大炊助
斉田城	三村左京允、新山玄蕃	
穴田城		赤木丹後
下原郷伊世部山城		明石兵部少輔与次郎



星の丸城・地下ホール

星の丸城には地下ホールがあり、マルチスライドによる迫力ある映像を体験できる。独特な音響と空間のなかで二匹の大蛇が動きだす。

中世の山城・小笠城址

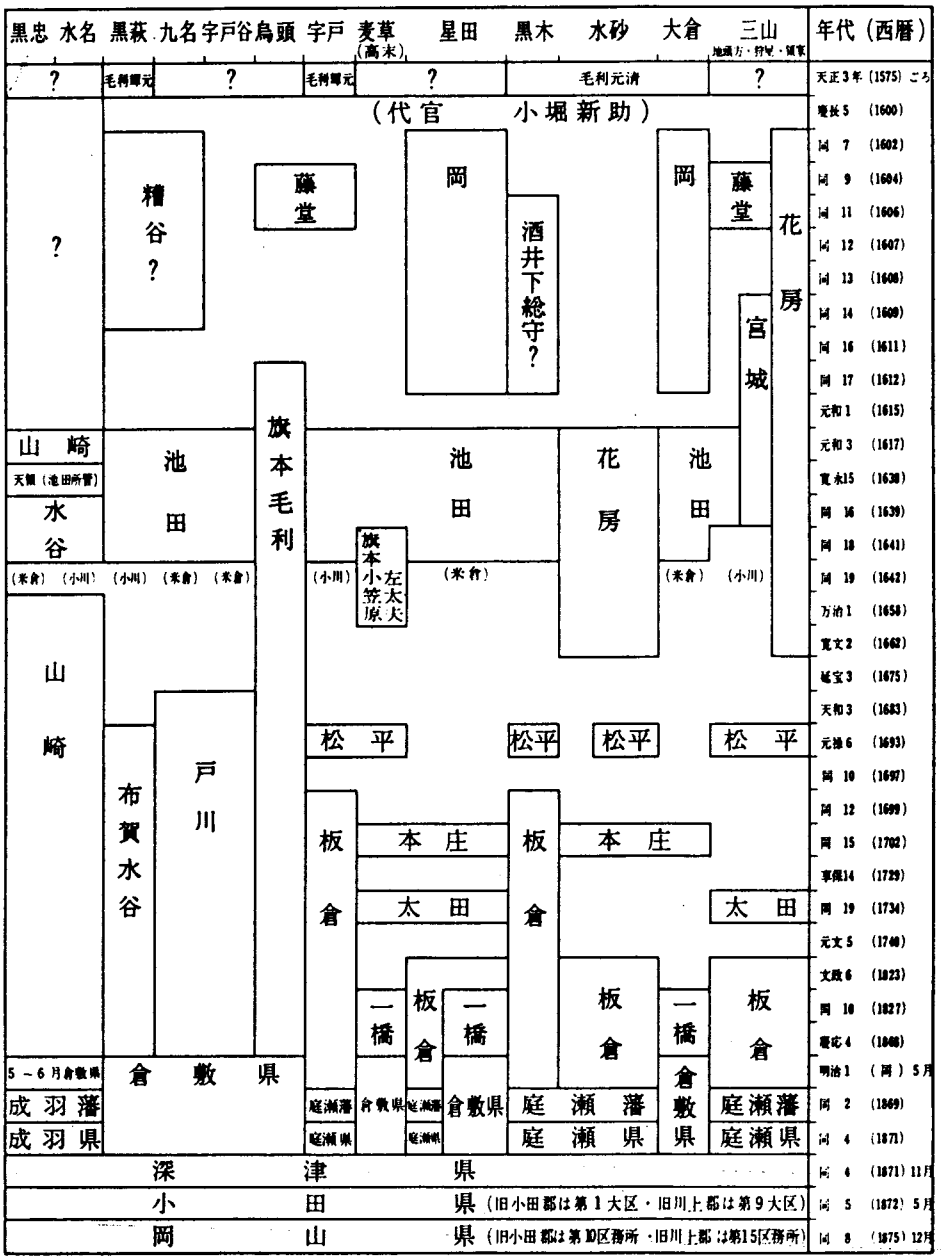
美里町の西北部、大字黒志城平にある小笠丸城址は、規模こそ小さいものの、井戸や竪堀それに武者隠しなどが残されており精緻な細工がほどこされている。

慶長一九(一六一四)年に至って廃城したと伝えられる。遠藤周作氏の小説「反逆」の舞台でもある。

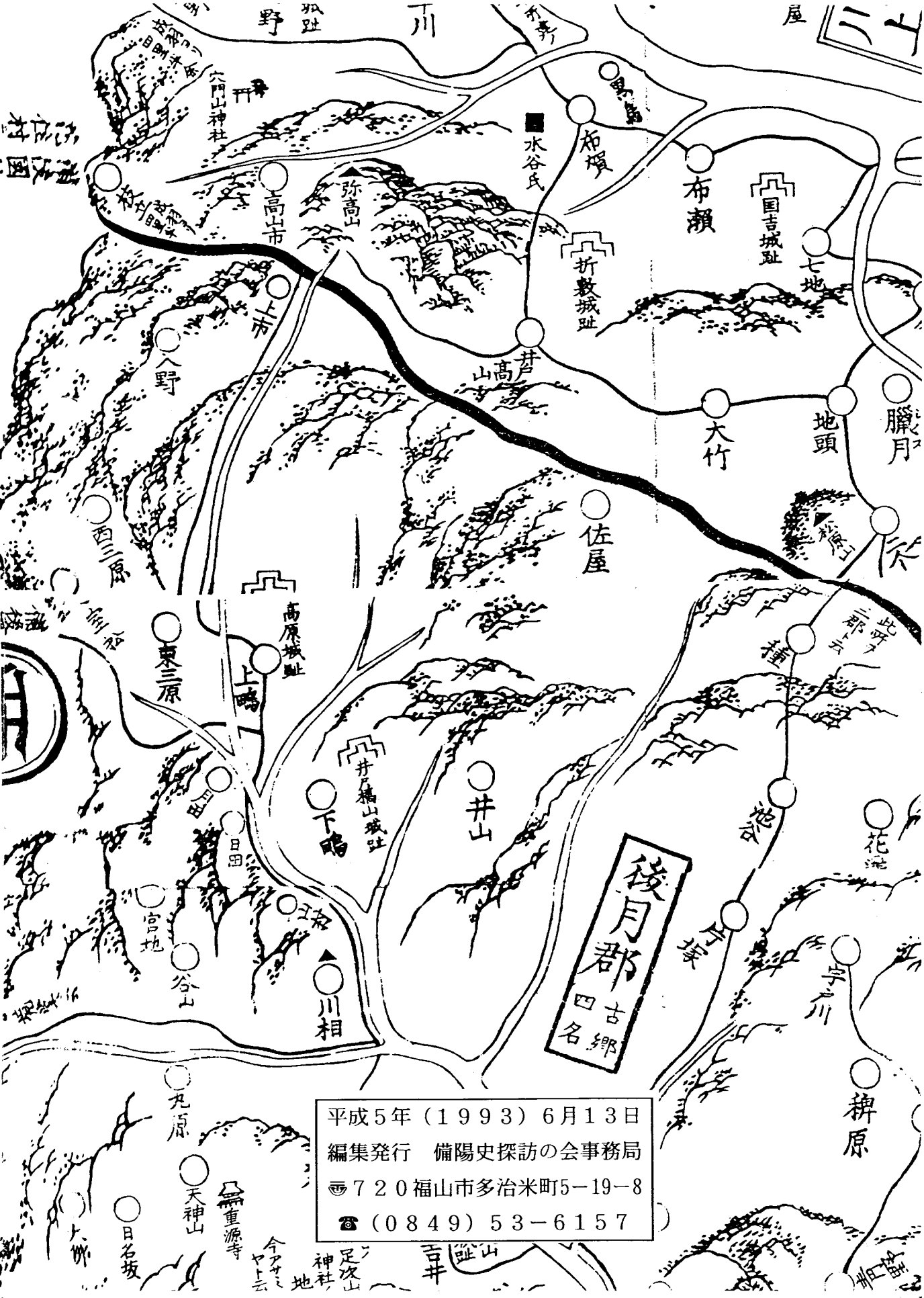
星の郷によみがえる中世のむら

中世夢が原

領主変遷一覧表　ただし，余白は天領，または不明の個所。（　）内の姓は代官。各領主の着任の年号を基準として統治期間としているから，離任は次領主の着任年までとする



（出典）「美星町史」「星のさと百景めぐり」「岡山県大百科」「岡山県の地名」
（協力）美星町教育委員会



平成5年（1993）6月13日
編集発行　備陽史探訪の会事務局
〒720福山市多治米町5－19－8
☎（0849）53－6157